

水と炎

第一卷

東京小町

主な登場人物・国

□ナジャ家□

■キト・ナジャ ■レアレス公国の国境付近、元はハットカバス自治区だったカトロス出身の少年。炎の神・カーミラの術者。肌は褐色、髪は黒、碧眼。

■シロウ・ナジャ ■キトの父親。元は大工だったが、生活のために鉱山の仕事を始めた為、鉱山特有の肺病にかかってしまう。肌は褐色、髪と目は黒。

□レジストン家□

■カルーア・レジストン ■レアレス公国において最も巨大な企業、レジストン財団の御曹司。生まれつき水の神・ウオーラの術者。肌は白、金髪、碧眼。父親の意向で、十八歳未満だが術法研究所でボランティアをしている。

■カンパリ・レジストン ■カルーアの祖父。レジストン財団の会長。若い頃神学を専門に勉強していたので、神に詳しい。カルーアの能力をいち早く見抜いた。カルーアの数少ない理解者。

■カシス・レジストン ■カルーアの父にしてレジストン財団の社長。丸八年息子と顔を合わせていない。

■ロック・ナス ■レジストン家の秘書・執事・メイドを束ねる執事長。

■マドラー・シングルトン ■カルーア付きの秘書。マーシャルアーツ（格闘技）に長けている。

□国・地域

■レアレス公国 ■民主主義制度の、世界に対しても強い影響力を持つ大国。軍隊を持ち、近隣のハットカバス王国とは歴史上何度も戦争をしている。

■ハットカバス王国 ■レアレス公国の南方に位置する国家。代々術者を輩出する血筋のハットカバス一家が支配している。

■ハットカバス自治区 ■ハットカバスが自治を認めている地区。

神と術者について

- ・自然物、人工物などを司る。見た目は全て女性で、姿は様々。「神」「女神」「物神（ものがみ）」とも呼ばれる。
- ・物神は特定の人間について、その人間を守る。守られている人間を「術者」という。
- ・術者は物神の力を「呪文」を唱えることによって使うことができる。呪文は神によって違う。
- ・物神は通常、うつすらとした姿（幻影）となっていて、術者以外の人間にはその姿を見ることはできない。幻影状態の物神は、術者と五十メートル以上離れることはできない（実体は無制限となり、遠隔で術者と物神で会話が可能になる）
- ・物神の幻影は天然の宝石を身につけることで消すことができる。しかしその場合、その術者は呪文を使うことができなくなる上、他人の物神も見えなくなってしまう。
- ・術者は物神を実体として呼び出すことができる。そうすると、術者ではない者にも神の姿が見えるようになる。術者は呪文を使えなくなるが、神が直接能力を行使できる。
- ・術者が物神を実体として呼び出すと、身体がうつすらと光り、術者だけにはそれが見える。
- ・物神は術者が死ぬまで術者についている。術者が死ぬと、転生を迎え、別の術者につくようになる。転生後の物神は転生前の記憶を持たない上、見た目などもまるで違う場合もある。
- ・物神と術者（男性のみ）の間に生まれた者を「精霊」という。人間の二倍の寿命を持ち、呪文を詠唱しなくとも神の力を行使することができる。術者同様、他の物神の幻影を見ることができる。術者が死んでも、精霊の能力はなくなるらない。
- ・物神には序列がある。例えば、太陽の神は炎の神の上級神、海の神は水の神の下級神である。

一章 水と炎

— 1 —

レアレス公国。

レアレスの首都レストン市に向かう全二十二本の列車路線のうちのひとつ、南方カトロロス地方を終点とするカトロロス線は、あと一時間くらいでレストン駅に到着する。

今走っているところは丁度海沿いで、光を浴びて光る海を車窓からは一望できる。

誰もが思わず浮き足立つその景色を目の前にしても、浮かない顔をした少年が窓際の席に座っていた。

黒髪に、褐色の肌、碧眼。

この国の国民は白い肌にたいいてい茶か金髪だ。つまり彼は、この国の血筋ではないということになる。

真新しい服を着て、ポリウムのない短髪は開けられた窓からの風にもたいて反応していない。切れ長の碧眼は外を見てはいるが、うつろだ。

向かい合わせの席、少年の正面には同じように黒髪褐色の肌を持つ男がいた。毛布を上半身にかけて、窓枠の方に頭を持たれかけさせて半ば寝転がるような姿

勢だ。目も閉じている。顔は半分隠れ、鼻から下が見えない。

いきなり男が激しく咳をし出した。外を見ていた少年の碧眼が、目の前の人に向けられる。曇った瞳はそのままだ。

咳がなかなか止まらないので、少年は立ち上がり男の肩に手をかけた。

「大丈夫か、親父」

少年の父親は咳のせいで、返答もできない有様だ。

眉間にしわを寄せたまま、少年は「水持ってくるよ」と言ってブースを出ると、車両後方のドアを開けて出て行った。

少年が出た次の車両は客車ではなく、トイレや洗面所、ゴミ捨て場となっていた。

少年は洗面所に行き、据え付けの金属のコップを取るとそれに水を汲んだ。振り返って車両に戻ろうとすると、彼を呼び止める声があった。

「おい君、そのコップは客席には持って行かないでくれよ」

少年は振り返った。制服を着た車掌が立っていた。

「あの、親父が病気で、咳がなかなか止まらなくて」

「え、大丈夫なのかい？ 医者を呼ぼうか？」

急に丁寧な心配口調になったので少年はいい車掌だ、と思った。「いい人」とは思わない。仕事でそうしているだけに過ぎないのだから。

「いや、持病で。水を飲めばおさまるから」

「じゃあ持って行っていいよ。下車する前に、ここに戻しておいてくれれば」

「ありがとう」

少年は車掌に背を向けると、水をこぼさないように気をつけて小走りに戻った。

少年は咳でびくつく父親の身体に苦労しながら、やっとのことで水を飲ませた。少年や父親の身体に水がかかったが、飲み終わるとやっと咳が止まった。

「すまねえ」

毛布から出た顔は少年とよく似ており、だが瞳は黒かった。

「あともう少しだよ。海が見えてるし」

父親はその言葉に上半身を起こした。少年は「やめた方が」というように手を伸ばしたが、父親は気にしなかった。

「ホントだ。海だ。…すげえなやっぱり」

少年は相変わらず暗い表情で何も言わなかった。

「おめえ海見るの初めてだろうが」

「ああ…」

「反応薄いな。すげえっておもわねえのか？」

少年は左の窓の方を向き、窓枠に手をかけその上に顎を乗せ外を眺めた。どこまでも広がる、空より少し暗い色の平面だ。

少年が暮らしていたのは、岩が多い砂漠一歩手前の地域だった。到底爽やか

さとは無縁の、どこまでも乾いた過酷な土地だった。それに比べたら、このみずみずしさはどうだろう。

何事もなければ嬉しかったんだろうなと少年は思った。今は父親と自分のこれからが気がかりで、そんなことに素直に喜べないのだ。

それを言葉に出して言えば父親も納得しただろうが、少年はあいにく口ベタだった。

また、それを父親も知っていた。

「ふん。お前はいつもそうだからな。思ったことは口に出せよ。遠慮なくな」「じゃあ言うよ。着くまで寝ててくれよ、おとなしく」

「言うじゃねえか」

父親はニヤリとしたが、素直に以前のように寝転がった。

少年は再び窓の外を見た。感動はできないのだが、やはり見ずにはいられない。

「なあ、キト」

「んん？」

少年、キトは窓を外を見たままぼんやりとこたえる。

「お前が連絡を取り合っていた、ジュツホーケンキュウジョってのが俺にはいまいちよくわからねえんだがな」

「寝ろって言っただろ。今ここでまた説明すんのかよ」

キトはうんざりだという風に言った。どうしてかという、父にそのことは過

去に三回くらい説明したことがあるからだ。

「分かったよ。落ち着いたらもっかい説明してくれよ。どうせ俺は行けねえからな」

その言葉を聞き、キトは思わず父親の方をきつと向いたが、父親はもう毛布をかぶって目を閉じてしまっていた。

術法研究所にはどうせ行けない。

自分が思っているよりも、父の病状は重いらしいという事実を突きつけられ、キトの心はさらに重く沈んだ。

列車は海沿いを離れ、建物が密集する都市へと入っていった。

■業務日報 4月10日 マドラー・シングルトン

07:00	起床
07:30	朝食
08:00	登校（遅刻の恐れがあったため自社ハイヤー使用）
08:30	学園到着。以下授業
15:00	学園に送迎。そのままレストン空港へ
15:30	レストン空港到着。プロペラ機でリマイン地方の町ベナへ
14:55	ベナ到着。術法研究所研究員、マリアノ氏と合流。活動の説明を受ける
16:10	活動開始
16:30	活動終了。再びベナからプロペラ機でレストン空港へ
17:00	レストン空港到着。ハイヤーで邸に
17:10	帰宅
17:30	自主学习。国語と自然学
20:30	夕食
20:50	入浴
21:30	就寝

■特記事項

・疲労が溜まっているように見受けられる。休息が必要

・術法研究所マリアノ氏より「ボランティアとはいっても、子供なのだしこれほど過度にやる必要性は感じない。いくらレジストン財団重役の父上の考えがあるとはいっても、物事には限度があるのでこれ以上彼を酷使する要請が出るようならばこちらから意見書を提出しようかと思う」

・マリアノ氏が意見書を提出する前に一度術法研究所所長と面会し、見解を探る予定

マドラーの報告書を読み、執事長であるロック・ナスはその作成主を見た。執事長室の机の前に礼儀正しく立ったマドラーは、まだ二十代前半という若さだった。それでもこのレジストン財団の大切な御曹司の世話役を一手に任せているのも彼女が優秀であるが故だったが、それでもロックからしてみればまだまだ若い、至らない点は多かった。

ロックが視線を送っても、マドラーはうろたえる様子もなかった。報告書の文面からして、質問を受けることが分かっているからだろう。

「休息が必要とは、どういう意味だ」

「はい。カルーア様は、睡眠も取られておりますし、風邪を引かれていますわけでもありません。ただ、ここ最近心ここにあらずというか、ぼうつとしている

時間が多くなっています。考え事をしていてるわけでもなさそうですし、強いストレスからくる退避行動なのだとすると何か問題があると思います」

ロックはオールバックにした髪の毛の生え際のあたりを押さえた。これはクセなので、自分でも抑えようがない。

「その問題とは？」

「僭越ながら、カルーア様は徹底した管理生活を送られています。管理することそのものが悪いというわけではなくて、カルーア様自身がしたいと思ってることをさせてあげる時間も少しは必要なのではないかと思うのです」

「それがないことが問題だということのか？」

「そうです」

マドラーは執事長に対しても物怖じしていなかった。カルーア様の世話を一手に任ざられていて、誰よりもカルーア様のことを知っている自負がそうさせるのだらう。

だがだからといってカルーア様自身が彼女を信頼しているかという点もまた話は別だ。またそのことは、マドラー自身もよく分かっている。

カルーア様が心を許している人間は少ない。

賢く、誰に対しても人あたりのいいカルーア様だが、その態度——誰にでも分け隔てなく優しく礼儀正しい——は、とても子供が「心を許している」態度ではない。

それは作られた親愛の態度であつて、眞の行動ではない。

カルーア様が本当に心を許しているのは、無理難題を言つたり、甘えている人間なのだ。

「術法研究所のマリアノ氏は、どのくらいで報告書を出すと思う？」

「おそらく今回言つた彼女のそれは、単なるはつたりだと思ひます。出すと言つて、カルーア様にかかる負担を少なくしたいと思つたのでしよう。現実にそんなことをすればどうなるかは、彼女もよく分かつていると思ひますから」

「カルーア様が未成年ながら、術者としてのボランティアに参加されているのは術法研究所所長も社長も、会長も、またカルーア様本人も承諾しているからされていることだ。マリアノ氏がそういう風に行くことは、カルーア様が『酷使されている』と彼女が思う理由がある筈だ」

「彼女にそう吹聴した人間がいるということですか」

「その可能性もありうる」

ロツクは今一度報告書を見て、先ほどのマドラーの意見を思ひ出した。

「したいと思つていることをさせてあげる時間も少しは必要なのではないか。こちらが聞く前に自分から聞いてきた。」

「そうではないが、お前とマリアノ氏、カルーア様に近しい者二人が何らか負

担になつていると感じるボランティア活動に関しては、再考の予知があるかもしれない」

ロックは部屋のドアがきちんと閉じられていることを確認してから、声をひそめて話した。

「ここからは独り言だが：お父上：カンパリ様はカルーア様をこのボランティアに参加させる理由を何ひとつ明らかににはされていません。カルーア様や表向きには『人生勉強』と言っているが、それが最大の理由ではないことは明白だ……」

マドラーが何か言いそうになつたので、ロックは目配せで「黙れ」と命じた。通じたらしく、マドラーはそのまま口をつぐんだ。

「神の力を持つ息子を、これほどまでにボランティアに駆り出す理由は何なのだ？ 私はその辺りをそれとなく探ってみようと思う……。正直私も、カルーア様にはもつと子供らしい生活を送って頂きたいのだ」

朝のダイニングキッチンで、一人の女性が朝食の支度をしていた。大きなお尻の背が低い女性で、薪式のコンロに置いたフライパンでソーセージを焼いている。

するとそこに、黒髪褐色の肌を持つ少年キトが現れた。

「おはよう、キト。よく眠れた？」

「ああ」

「よかったわ。そこに座って。今すぐできるからね」

キトは座らずに、机の脇をまわって台所に来て何か手伝おうとした。

「頼むことはないから、いいから座っておいで」

ぴしゃつと言い渡され、キトはすぐごと机の前に戻り、椅子を引いて座った。

ダイニングキッチンは六畳くらいの小さな部屋だ。木の机に、椅子は今キト

が座っているものの他に一脚。机の上にはパンが入ったかごと、バターが入っ

た壺、ギンガムチェックのランチョンマットにフォークとナイフ。

毎日パンにありつける生活には、一週間前くらいからなっていたが、それで

もまだまだキトには嬉しい。

「なんか、一人じゃない食事なんて久しぶりで嬉しくて。たくさん作っちゃっ

たよ」

「昨夜は遅くなって…ごめん」

「あんたのせいじゃないだろうよ。お父さんの病院の入院手続きしたり、役所行って住民簿に登録してきたり、術法研究所に行ったりしてたら遅くなるのは仕方ないさ。それをあんたみたいないな子供が一人でやったんだから、えらいことだねえ」

キトは机の上に置いてあつた花瓶の花を見ながら答えた。

「レストンの駅に役所の人があった」

「なあんだ。役人がついてたのかい。それにしちや遅くまで子供を引っ張りまわしたねえ」

女性は焼き上がったソーセージを皿に盛った。皿の片側には既にサラダが盛られている。

女性は皿を二つ持つとテーブルの側にやってきて、キトと自分のランチョンマットの中央にそれを置いた。再びガスコンロのところに戻ると、鍋の蓋を開けスープをかき回した。

「その役人の人が方向音痴で、迷って」

「なんだそりや、アハハハハハハハ」

女性は身体をゆすって笑った。

「はい、おまたせ」

スープの入った皿をランチョンマットに置いて、女性がキトの対面に座った。キトは両掌を合わせ、目を閉じた。

「サンズ、カーミラに」

サンズとは砂の神、カーミラは炎の神だ。生まれてからずっと、キトは食事の前にこうして祈ってきたのだろう。

それを見た女性の目がふつと悲しそうな光を帯びたのに、キトは目を閉じていたため気付かなかった。

言い終わるとキトはフォークを手を取った。女性も食べ始める。

この女性は、キトが未成年でありながら保護者がいない状況に国が斡旋してくれた養母だった。名前はサクラ。ハットカバス人のような名前だが、れっきとしたレアレス国民だ。

サクラは既に子供が独立し、夫婦で生活していたが夫が数年前に亡くなり一人暮らしをしていた。そこで里親登録をしたところ、親が生きてはいるが一緒に生活できないキトを養育することになったというわけだ。

サクラは特にキトにあれこれ根掘り葉掘り聞こうともしなかった。その代わり無口なキトが退屈しないようにか、この都市のことについていろいろ教えてくれた。

まだまだ都市と地方の格差が激しいのがレアレスの現状だ。特にレアレスは国土の拡大を続けており、他国から吸収された地方は様々な分野での整備も進まない。

キトのいた国境付近のカトロス地方では、キトのように読み書きができない

子供が当たり前だが、このレストンでは子供は六歳から十二歳までの間、全員が無料で学校に通えるのだということだった。それでも大多数の子供はそれよりも後、さらに十年くらいの間お金を出して勉強するのだそう。そして様々な知識や技能を身に付け、自分がなりたいと思う職業に就いたりするのだそうだ。

サクラに教えられるまでもなく、この都市にいる子供はみないろいろな面で恵まれているのはキトは既にいやというほど分かっていた。ここにやってくる前に役人に貰った仕立てのよい、肌触りのいい服も、電車の中でそれよりもっといい服を着た子供に大勢出会って、この都市では当たり前なのだと思います。知らされた。

全ては偶然から始まったのだった。

キトがまだ幼い頃に死んだ母に代わり、男手ひとつでキトを育ててきた父親は慣れない鉱山の仕事で肺をやられてしまった。

地方の設備ではどうにもならない病気だったため、カトロスから一番近い都市であるナーズ市の病院に行った時、キトの不思議な能力に気付いた人がいたのだ。

その人のしてくれたことは、キトは決して忘れないと心に誓っていた。その人がいなければ、父も病院に入院できなかったし、自分もこうして毎日温かい食事にありつくこともできなかったのだから。

サクラが用意してくれた食事は、キトは半分くらいしか食べられなかった。

もともと貧しい生活をしていて素食だったため、背も低ければがりがりに痩せているキトを見れば食べられないことくらい分かりそうなものだが。

「もつと食べればいいのに。大きくなれないよ」

とサクラは渋ったが、無理なものは無理だ。

「学校への道は分かるね」

「別の人に地図書いてもらった」

サクラが用意してくれた、学校へ行くカバンを肩にかけキトは玄関に立った。

「いつてらっしゃい」

その声に一瞬、キトは戸惑ったように振り返り

「おばさん、行ってくる」

と言うと歩き出した。

サクラの家から少し離れたところで、いきなり頭上から声がした。

「随分といい子ちゃんしてるじゃないのよ」

キトは地図を見たまま、答えなかつた。

「何とか言ったらどうなのよ」

キトの頭上に舞い、普通の人間には見ることも声を聞くこともできない炎の

神・カーミラが不機嫌そうに言った。

「何が不満なんだよ」

キトは口に出して答えた。普通の人間には見えないから、誰もいないところで

しかこういふ風に会話することはできない。

もっとも側にいる他人が、キトの父親のように慣れていればいいが、そうで

はない人間が一人でもいた場合は、黙っているに越したことはないのだ。

「あんたにしちゃ、随分とおとなしく人様の好意に甘えてるなあつて」

「いけないか？」

「いけないはないけどさ……カトロスにいた時だつて同じようにしてくれる人は

いたじゃないのよ」

カーミラが見える術者には、彼女の燃えるような赤い髪がまっさきに目に付く

筈だ。肌の色も真っ赤な彼女は、黙っていても怒っているように見える。

彼女の姿は透けていて、人間や実在する物質との違いははっきりと分かる。

神に守られ、呪文によって神の力を行使できる術者には全員、神の幻影がついている。

そしてその神の幻影は、同じ術者にしか見えない。

「カトロスにいる人の親切は受けられない方がよかったんだよ。親切にしてくれる人たちだってギリギリの生活を送ってたんだから。ここにいる人は元からカトロスの人よりもずっと裕福なだから、やってくれる親切は遠慮しなくていい」
カーミラは黙ってしまった。彼女が黙れば、元々無口なキトはもう何も言わない。

しばらく経ってからカーミラは言った。

「あんたって優しいんだよね、やっぱり。ごめんね、あんないい方して」

「いいさ。っていうか、一つ助けて欲しいんだけど」

「なに？」

「道に迷った」

「アンタ地図貰ったんでしょ!？」

ヒステリックに叫ぶ、自らの守り神にうんざりしながら

「上から見て、探してくれよ」

とキトは空を指した。

カーミラは怒った顔のまま、赤い髪をなびかせて上空に飛んだ。

神は幻影の状態では、術者とは五百メートルたらずしか離れることはできな

い。神が移動したくとも、術者に引つ張られるのだ。神は一人の人間を守って
いながら、その人間に縛られてもいるのだ。

現に人間の意志を引き金としなければ、その能力を發揮することもできない。
「えーっと…あれかな。赤い屋根の大きな建物がある。広い庭があるし」

「近付けないか？」

「そんなことしてるとら行つた方が早いわよ」

カーミラは上空から降りてきて、キトの先に飛んで先導し始めた。

「こっち。遅刻しちゃうかもしれないから急ごうよ」

この都市では分刻みで時間のことはうるさく言われる、ということをサクラに
聞いていたのでキトは

「ああ」

と言つて走り始めた。

「ねえ、キト」

キトは走るのに精一杯で答えない。

「まあいいわ。黙って聞いててよ。考えてみたらさ、アンタが貰つた地図つて
文字で説明が書いてあつたでしょ？ それじゃ迷うわよね。アンタ字が読めない
いんだからさ。カトロスでやるように、絵で書いてもらわなきゃだめだったの
よ」

やがてカーミラが探し当てた建物の前についた。低めの門は開かれ、正面が

大きな庭になっている。といつても芝生などではなく、白い線でトラックなどが描かれた土の地面だ。

門の右側には見事な表札がつけられていたが、字が読めないキト、人間の字など分からないカーミラ共に、ここが目指す学校であるかどうかの判断はこれだけではつけられない。

「中に入って聞くしかないか」

庭の一番奥に、三階建てくらいの見事な建物があった。そこまで歩いていって、誰かに聞いてみるしかないようだ。

「待って。車が来た」

この都市に来て初めて車というものをキトもカーミラも見したが、その車がこちらに向かってきたのでキトは足がすくんでその場から動けなかった。

車は近づくにつれ減速し、キトの目の前に横付けになる形で停止した。真っ黒な車だった。

こんなものがあるなスピードで動くことが最初から信じられなかったが、間近で見るとさらに不思議でしょうがなくなる。

車が止まるなり、キトの目の前の後部座席の扉が開いて黒いスーツの若い女性が出てきた。

「カーリア様、急いで！」

反対側の後部座席の扉の方を見ながら言った。同時に反対側の運転席から、電

車の車掌と同じような帽子を被った運転手が出てきて後部座席の扉を開けた。

開けた中にいたのは、少年だった。扉が開くとすぐに外に飛び出たが、開いた扉のロック部分にブレスレットを引っ掛けてしまっていた。

「あ！」

勢いよく外に出たせいでブレスレットはちぎれ、地面に落ちた。

少年はそのブレスレットを急いで拾うと、黒スーツの女性のところに駆け寄り、

「切れちゃった。持ってた」と手渡した。

その時、キトは心臓が止まるかと思った。

少年が女性にブレスレットを渡した次の瞬間、彼の体内からこの世ならぬものが飛び出したのだ。

女神だった。水色の髪をして、羽衣をまとった、見た目は少女の女神だった。「あなた！」

カーミラが思わず言うと、その女神も気付いてこちらを見た。同時に、その真下にいる少年もこちらを向いた。

純粹なレアレスの血筋であることを示す、透き通るような白い肌に金髪、そして碧眼だった。肩につくかつかないかのところで切り揃えられている髪は、

どこも直線ではないキトの髪とは違って前髪も真つ直ぐに伸びていた。

少年もまた、キトの神、カーミラに気付いていた。

「きみは……」

裕福な家柄の子供らしい少年は、キトのことを真つ直ぐに見てつぶやいた。

キトは、どきどきする心臓を一生懸命なだめようとしながら

「あの……すみませんが、レストン第四初級学園はここですか」

と、普段の彼らしからぬ長さで丁寧さを持った言葉で聞いた。

「そうだよ。君、転校生？」

元々学校に行っていないなかつたのだから、転校というのとは違うと思いつつも

キトは

「そう」

と言った。

「なら、受付に行くといいよ。マドラー、案内してあげてよ。ボクは教室に行

くからさ」

「え？ は、はい」

マドラーと呼ばれた黒スーツの女性が返事をし終わらないうちに、カルーアは

走り出していた。走りながら一度だけこちらを振り返り

「お昼にでも話がしたいな！ また後でね！」

と叫んだ。